



豆類の病害虫防除について

7月1日現在、豆類の生育は大豆で平年並み、小豆・金時・手亡で1日遅くなっています。防除開始の目安となる開花始の平年値は表1のとおりですが、は種日・品種によって前後するため、ほ場をよく観察し開花始を把握しましょう。

病害虫の薬剤防除に当たっては、近接する農作物に農薬が飛散しないように風向き等に注意し、適正に散布しましょう。また、耐性菌の発生を防ぐため、同一系統の薬剤の連用は避けてください。

表1 7月1日現在の生育遅速と平年の開花始（十勝農改本所）

	大豆	小豆	金時	手亡
生育遅速（日）	±0	-1	-1	-1
平年開花始（月日）	7/17	7/23	7/15	7/22

マメシンクイガやアズキノメイガ、食葉性鱗翅目幼虫の被害が多い場合は、下記の防除体系例を参考に殺虫剤を組み合わせることで適期防除に努めましょう。

表2 大豆防除体系例（菌核病・マメシンクイガ・食葉性鱗翅目幼虫）

防除開始時期		防除薬剤	倍率	系統名
1回目	開花始後 10～15日	プライア水和剤（菌核病）	1,000	Nフェルカーバメート・MBC
		プレバソンフロアブル5（マメシンクイガ）	4,000	ジアミド
2回目	1回目防除後 10日	ファンタジスタ顆粒水和剤（菌核病）	2,000	QoI
		ゲットアウトWDG（マメシンクイガ他）	3,000	ピレスロイド

※ 大豆のカメムシ類について

プレバソンフロアブル5はカメムシ類には効果がない。開花後（莢伸長期以降）、ほ場でカメムシ類が確認された場合は、カメムシ類に登録のある薬剤（トクチオン乳剤など）を使用し防除に努める。

表3 小豆防除体系例

(灰色かび病・菌核病・炭そ病・アズキノメイガ・食葉性鱗翅目幼虫)

防除開始時期		防除薬剤	倍率	系統名
1回目	開花始後7~10日	※1 プライア水和剤	1,000	Nフェニルカーバメート・MBC
		または オルフィンフロアブル	2,000	SDHI
2回目	1回目防除後10日	ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000	QoI
		スミチオン乳剤	1,000	有機リン
3回目	2回目防除後10日	プライア水和剤 または カンタストライフフロアブル	1,000 1,000~1,500	Nフェニルカーバメート・MBC SDHI

※1 炭そ病との同時防除の場合はプライア水和剤、菌核病を重点におく場合はオルフィンフロアブル。

※2 マキバカスミカメの防除適期は開花始の25~26日前後である(開花始から毎日の日平均気温の積算515~520℃に達する時期)。ほ場の開花始を確認し防除を行う。

※3 マメアブラムシの発生が見られたら、速やかに防除を行う。特に、生育後半は薬剤がかかりにくいいため、水量を増やすか、浸透移行性のある薬剤を選択し、効果的な防除を行う。

表4 金時・手亡防除体系例(灰色かび病・菌核病(金時類))

防除開始時期		防除薬剤	倍率	系統名
1回目	開花始後5~7日	プライア水和剤	1,000	Nフェニルカーバメート・MBC
		または オルフィンフロアブル	2,000	SDHI
2回目	1回目防除後10日	ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000	QoI
3回目	2回目防除後10日	プライア水和剤	1,000	Nフェニルカーバメート・MBC

表5 菜豆類のインゲンマメゾウムシ

防除開始時期	防除薬剤	倍率	使用時期	系統名
収穫日に近い時期 (莢の緑色が完全に抜けてきた頃)	ダントツ水溶剤	2,000	収穫前日	ネコチノイト

“安全確認” 「みんなの願い農作業事故ゼロ」

農作業中の水分補給等を行い、体調管理を心掛けましょう。